

第40回（2024年度）マツダ研究助成一覧 - 青少年健全育成関係 -

分野	研究題目および研究概要	研究代表者	所属	役職 (応募時)	研究 期間 (年)	助成 金額 (万円)	地域
若者の居場所づくり	自立準備ホーム入所者の非行からの離脱プロセス	大江 将貴	帝京大学	助教	2	81	東京都
	本研究の目的は、非行経験者の非行からの離脱過程を明らかにすることである。さらに、非行経験者を受け入れている自立準備ホームが、非行からの離脱過程にある少年にとってどのような意味を持っているかを明らかにすることも本研究の目的である。具体的には、非行経験者が入所している自立準備ホームを対象とし、非行経験者である少年と自立準備ホームのスタッフに対してインタビュー調査を実施する。特に、少年に対しては縦断的なインタビュー調査を行うことで、非行からの離脱過程における継時的な変化に注目する。						
若者の居場所づくり	障害や慢性疾患を有する者と同居するヤングケアラーのためのオンラインピアサロンやウェブセミナーの開催と効果検証	涌水 理恵	筑波大学	准教授	2	80	茨城県
	介護・看病・療育を要する特定の家族員を無償でサポートする家族らをケアラーと呼ぶ。日本では医学の発達で救命率が上がり、経管栄養や痰の吸引、呼吸管理など医療的ケアを必要とする児者も含め、在宅療養者が急増している。早期退院・在宅移行という国の方針もあり、在宅療養者のケアを余儀なくされたケアラーが地域資源を活用できぬまま児者を抱え込み社会から孤立し、抑うつ状態やストレス、疲弊を抱える実態が報告されている。本研究では障害や慢性疾患を有する者と同居するヤングケアラー、青年ケアラーの負担感と困難感を軽減し、また彼らと、彼らに日常的にかかわる専門職を教育・啓発する目的で、1) ピアサロンの場の提供、2) 専門職への個別相談、3) ウェブセミナーの開催を柱としたリモートケアシステムの社会実装研究を行い、1)2)3)の利用実態をまとめ、効果検証を試みる。						
地域連帯、コミュニティづくり	こどものポジティブな行動を促す接し方のプログラム開発:地域住民と協働創造	小口 真奈	沖縄科学技術大学院大学	リサーチ・フェロー	2	75	沖縄県
	本研究は、発達障害のうち、とくに注意欠如多動症の傾向がある子どもとその保護者を対象に、研究知見をもとにしたサポートプログラムの効果を検証し、LINE・アニメ動画・ウェブサイトなどを用いた支援の普及を目指している。そのため、実際にサービスを利用するエンドユーザーであるコミュニティメンバーと、プログラム内容や普及プロセスについて共創する。このような共創プロジェクトの過程や効果検証の結果に関する発信を通して、地域におけるコミュニティ形成を促進させ、プログラムの定着を展望している。						
自然とのふれあい	動物園・水族館の行う「移動動物園」や「動物貸出」の意義と教育効果の検証 - 動物にふれあう学習機会の格差解消に向けて -	小野 永貴	筑波大学	助教	2	70	茨城県
	旧来、日本の多くの学校はウサギ等を飼育し、児童が動物へ接する機会が確保されていた。しかし、動物飼育を実施する学校は大幅に減少しており、学習機会の格差が生じることが懸念されている。この問題に対し本研究は、動物園が行う「移動動物園」「動物貸出」等に注目する。日本の動物園は、教育的役割を果たすために、園内での教育活動のみならず、園外での学校向け事業を実施している園が多数ある。これらの事業が、子どもたちが「動物にふれる学習」の機会を保障する手段として有効か、検証することを目的とする。						
若者の居場所づくり	子どもの居場所と遊びの夢中度 - サウンドとアートに着目した遊び場の創出 -	駒 久美子	千葉大学	准教授	2	94	千葉県
	本研究は、子どもの居場所と遊びの夢中度を、サウンドとアートに着目した遊びの「場」の創出を通して検証するものである。子どもにとって、1日の大半を過ごす保育所が満足できる居場所であることは、子どもが等しく健やかに育つための重要な課題である。子ども自身が「ワクワク」しながら、様々な直接体験を通して「知る」こと、それを用いて何かを新たに「創る」こと、その循環を読み取る遊びの「場」を創出し、その「場」が子どもたちにとってどれほど満足できる居場所となりうるのかを実証的に検証する。						
合計5件					助成金総額		400万円